

## 音読を成立させる要因について

—先輩教師から学んだこと—

松江市立女子高等学校 野田 大三郎  
鈴峯女子短期大学 田邊 祐司

### 0. 本研究の目的

中学校・高等学校の英語授業の中で音読(oral reading)は必ず行われる活動のひとつである。音読は文字言語と音声言語を結びつけ、学生に発音の基礎を身につけさせ、ひいては Oral communication 活動へと橋渡しをする重要な活動であることは言うまでもない。

ところが最近生徒が音読練習の時あまり積極的ではないようである。例えば chorus の段階で、どんなに教師が一生懸命声をだしてモデルを示しても、あまり生徒がのってこない。そのため、悪くすれば、音読活動に教師自身の熱意が入らず、この活動が形式的に終わってしまい、ますます生徒がのらなくなってしまうという悪循環に陥った体験を持つ教師は多いのではなからうか。もとより筆者は音読肯定論の立場にたつ者である。なんとかして音読を成功させ、有効な英語指導の促進剤にしたいと思い、日々努力をしている。

近年音読の教育的な意味を今一度見直し、教室に「声」を取り戻そうという動きが特に、国語教育の分野において盛んであり、音読活動にも様々な取り組みがなされ始めた。(青木、1990;野口,1991)。英語教育の分野でも音読活動に対して、理論的な意味での研究、指導上の工夫などの報告など、授業の事実に基づ研究が、少しずつ報告されるようになってはきているが、明日からの指導の一助となる研究はまだ数少ないようである。(飯野,1970;後田,1982;田邊,1987;柳井,1988;近江,1988;築道,1989;寺島,1989;青木,1990;築道他,1991)

本稿では以上を踏まえ、音読指導を見直すための研究の一環として、従来の授業分析のアプローチではなく、英語の指導(とりわけ音読指導)に成果をあげられたとある一先輩教師(Y教諭)にスポットをあて、その教師の音読指導がなぜ生徒を引きつけたのかを解明すべく、教師本人へのインタビュー及び教師の授業を受けた学生へのアンケート調査の両面から得られたものをまとめることにする。実際、筆者はY教諭の授業を何度となくビデオに収め分析させていただいたが、従来の視点からではどうしてもつかむことのできない先生独特の「うまさ」「技」と言うべきものがあることに気が付いていた。今回、先生にこれまで筆者が抱いていた疑問を直接ぶつけてみることで、その秘密に少しでも近づこうとしたのが、本研究の動機であった。なお、Y教諭の音読がいかにもすぐれていたのかを活字で書き表すことは不可能に近いので、これまで先生の授業を参観した多くの人の誰もが、その名人芸ともいえる授業に感嘆し、とりわけ生徒の音読の声の大きさ、積極的な姿勢、ポーズ、ストレス、イントネーションの適切さ、各英文の意味と音声表現の見事な一致に圧倒され教室を出て行くということを記すのみにし、先生の音読指導が他に類を見ないほどであったことを、前提として論考をすすめることにする。その意味では、本研究の手法は主観的であるが、真実をまげるものでは決してない。

### 1. Y教諭の授業

Y教諭との出会いは筆者(野田)が松江市立女子高校に赴任した昭和61年4月のことである。先生(以後Y教諭をこのように呼ぶ)の授業はピンとはりつめた学習的雰囲気の中で整然と生徒が活動し、まるで早朝の寒稽古の様なすがすがしい印象を受けたことを記憶している。ど

うしたらこのような授業ができるのか、筆者は興味と驚嘆の目で授業を参観させて頂いた。先生は昨年3月、30数年にわたる教職生活に終止符をうたれた。先生の典型的な授業形態は次のようなものであった。

1. recitation (1、2年生が中心、3年生は時と場合による)
2. individual reading (本時の内容)  
chorus reading
3. comprehension
4. explanation  
translation
5. consolidation

特徴としては、内容理解、説明、の前に音読が入っていることである。現在では理解の後で音読をするほうが一般的である。(五十嵐, 1981; 隅部, 1988)。

## 2. インタビューから探る音読を成立させる要因

音読練習はもちろん音読自体のために存在しているのではなく、英語授業の成否と深いところで密接に関わりあっている。そのため、音読を成立させる要因を探ることは、音読を成立させる要因を探ることは、とりもなおさずという観点から先生の授業を分析することになるようである。実際、インタビューは多岐にわたり(例えば先生の教育哲学、細々とした生徒指導法、指示・評価の仕方など)長時間費やして行われた。ここにその全てを記載することはできないので、以下音読に関係する点について簡潔に内容をまとめてみることにする。なお、先生の発言は「」で囲み、筆者のコメントと区別した。

### 2. 1. 音読の意義について

「言葉は、話す・聞く→読む・書くの順番で修得されるのが順序である。中学生・高校生の英語は native speaker に例えれば、乳幼児から小学生低学年程度のものに過ぎない。そういう意味で、思慮深い大人の真似をしては英語の上達は望めない。だから大きい声で音読・発表する必要がある。そしてこのようなことが将来、直読直解の力につながっていく。このようなことを絶えず生徒の気持ちの中に注入していく。」

### 2. 2. 音読を必要とする英語学習者の定義について

「英語学習の初級段階では教師が範読(model reading)して正確な読み方を示し、それを反復させ、その後音読をさせるという方法がとられ、中級・上級に進めば黙読に移っていくというのが一般的な考え方である。しかし非常によくできる一部の生徒(ある分野を除けば教師以上に英語の読める生徒)以外は原則として初級として考える。この出発点を間違えて授業を構成すると、生徒の実態とはかけ離れた自己満足のとんでもない授業になってしまう。」

### 2. 3. chorus reading と individual reading について

「音読練習時には sense group ごとに読むくせをつけることが大事である。必要であれば sense group ごとに印をつける。そしてはっきり声に出して言ってみる。chorus reading に関しては、全員の声が揃う必要はない。自分の力で速く読める者は読み、ゆっくりしか読めない者はゆっくりと読めばよい。先生と1対1で読んでいる気持ちで読む。そして、chorus で口だけ

動かしている生徒を指導するために individual reading を適宜織り混ぜながら授業を進めていく。」

#### 2. 4. 音読と読解について

子の段階に関しては、かなり時間をかけて説明されたので、次のようにまとめてみた。前述した通り、先生の授業はまず最初に individual reading から始まる。そして、この時に生徒の理解の程度、予習の程度、つまりいている箇所を察知する。同時に間違っている発音・意味の切れ目を訂正し、その生徒に正しく発表させ直すとともに残りの生徒全員にも chorus で repeat させる。この時点ではまだ生徒はどうしてそのように区切って読むのか理解していない。どうしてであろうかという疑問が心に引っかかったままである。その後 explanation , translation に入るわけである。この explanation の時に文の理解を助けるために必要十分なだけの例文を提示する（理解が困難な場合はたくさん）。そして意味が理解できた段階でその文を speedy に何度も chorus で言わせてみる。ここで、説明の終わった3~4行から1パラグラフを individual , chorus, buzz reading など適宜読ませ、意味がとれたかどうかを確認する。生徒はこの時点で直読直解ができ、最初の individual reading の時にいただいた疑問も一挙に解決するように指導を組み立てておく。指導においてはこの最後の部分を最も重要視する。最初の individual reading の疑問は後半部分での理解をより深める伏線になる。

#### 2. 5. 音読と成就感について

「このようにして意味が理解できたうえで読み (oral reading) ができ、そのうえ教師が大いにほめてやれば生徒にとってこれ以上の喜びはない。上手に音読ができた時には大いにほめてやることも音読を成功させる重要な要素である。

ところで、生徒は英語を口に出すことに我々が想像を絶するような恐怖感、不安感——こんな発音をしたら皆に笑われるのでは——を持っている。しかし、一旦発言して認められるとどんどん発言するようになる。うまく response を follow してやる必要がある。」

#### 2. 6. 実のりある音読練習（英語学習）を育む教室の雰囲気について

「高等学校入学時点の生徒は生活（学習）習慣ができていない。その習慣ができなければ英語の学習的雰囲気はつくりだせない。なぜその習慣を身につけなければならないかを絶えず説明し、納得させる。そして学年の初めに、いくつか約束ごとをつくりそれを実行できるまですこぶる厳しく指導する。例えば、指名されたらはっきり大きな声で答えるように約束する。その理由もよく納得させる。「英語は言葉だから相手に聞こえなければならない」とか「大きな声はそれだけで教室の英語的雰囲気を盛り上げる」や「聞こえなかったら、他の生徒は白けてしまってやる気を失ってしまう」などと説明する。そのような雰囲気の中で、自分の言った発言を全員の生徒がよく聞いてくれ、その発言を教師にも大いにほめられ、そしてその発言を（それが英語の場合は）全員に chorus で言わせる。その生徒にとってみれば自分の発言が認められた上に、全員で練習もした。嬉しい限りではなかろうか。」

### 3. 学生へのアンケートの結果

以上、Y先生とのインタビューの中から得ることのできた音読活動に関するまとめである。これを読む限りにおいては、先生の音読に対する哲学は奇をてらったところは少しもなく、むしろ純粋すぎるぐらい基本を大切にしておられることがわかる。これについては後述することにするが、次に12名という限られた人数ではあったが、Y教諭の指導を受けた平成3年度の卒業生

の声をまとめることにする。アンケートは選択及び自由回答式を併用し、1991年の夏休みにかけて、郵送し実施した（Appendix 参照）。本来なら授業を受けた卒業生全員に協力を依頼したかったが、時間の制約上できなかった。選択式の設問に関する結果は以下、No.1（音読に関するアンケート）及び No.2（英語指導全般に関するアンケート）の表にまとめ、自由記述式の設問に関しては原文のまま記載する。

No.1 （音読に関するアンケート） （単位は %）

横軸 1～13は 質問番号、縦軸 A～C は回答記号

	1	2	3	4	5	7	8	9	10	11	12	13
A	50	42	42	92	66	92	92	100	50	17	58	75
B	25	33	16	8	8	0	0	0	0	75	8	8
C	25	25	32	0	25	8	8	0	50	8	44	17

No.2 （英語指導全般に関するアンケート）

	1	2	3	4	5	6	7	8
A	75	75	83	83	92	58	58	92
B	8	8	0	0	0	25	8	8
C	17	17	17	17	8	17	34	0

記述部分に関するアンケート結果のまとめ

No.1

4 chorus reading の時に大きな声で読んだ理由

大きな声で読まないと思われる（迫力が違う）から。一斉読みの後指名されて読むことがあるから。みんなも大きな声で読んでいたから。生徒が読めなかったり自信がないような時、先生が何度も繰り返して読んでくださったから。きちんと発音しないとアクセントやつづりが書けないから。

6 chorus reading の際の指示で印象に残っているもの

「アクセントに注意して大きな声で読め」。「単語と単語を組み合わせたように読んではいけない。文章の区切れまで一気に読むところは読むように」。

1.4 英語学力と音読の関係

英文をきちんと音読できないと意味の理解ができないと思う。読めるようになると英語が臆くうでなくなる。文法も大切だけど、きちんと発音できないと外国人に通じないと思う。何度も音読の練習をして英文に慣れれば、ある程度は英語がわかるようになると思う。音読すれば、発音がはっきり分かるので、覚え易いし忘れにくいと思う。文の意味がよく分かっていないと、うまく区切って読めないで音読は内容理解と関係がある。

No.2

### 3 「約束ごと」の具体例

指名されたら、返事をして大きな声で発表する。分からない時にも、黙っていないで、はっきり「分かりません」と言い、さらに、どこが分からないかをはっきり言う。先生が説明している時は、姿勢をただし、まっすぐ先生の方を見る。日本語訳を書かない。訳を書くときは、その部分だけ、ぱっと見てわかるようにノートに書く。「こっちを見て」と言われたら、勝手に下を向いたり、ノートを書いたりせずに、すぐ前を向く。

### 4 どうして授業に一生懸命取り組んだのか

先生が本当に一生懸命教えてくださったし、授業は厳しかったが、他の授業と比べて集中もできたし、授業内容も充実していたから。予習をしていかないと授業にならないし、みんなにとり残されるような気がしたから。英語がすきだったし、目指す大学に入りたかったから。一生懸命取り組まないと怒られるから。いいかげんな予習では、先生にあてられた時、すぐに答えられず、見放されてしまうから。英語は大切で、なんとかついていかなければならないと思ったから。

### 7 英語の苦手な生徒の指導で印象に残っていること

絶対に全員がわかるまで教えられ、1日に3行ぐらいしか進まなくても何度も練習され、次の日も復習された。苦手な人にはよく指名された（だから予習をしっかりとしないといけない）。定期試験後に成績の悪かった生徒は暗唱文を何回か書かなければならなかった。指名する時、苦手な生徒には基本的なこと、できる生徒には応用的な質問をされた。

### 8 中学時代と比べた学習姿勢の変化

中学での英語の勉強は単語を調べるぐらいだったが、高校では単語よりも連語や文法の方に時間をかけて予習したし、ただ調べるだけでなく、例文などもノートに書いたりして理解し、どこが分からないかをはっきりさせて学習していた。高校時代の印象があまりにも強烈すぎて、中学時代の印象がほとんどありません。

### 9 先生と他の先生との違いは

先生の授業は厳しかった。だから勉強もして行つたし、そうしないといけない。授業中にはほとんどの人が1回以上指名されていた。そして、先生は誰がどういう発言をしたか、どういう間違いをしたかをよくおぼえていらした。他の英語の先生の場合には訳があつていれば次にいかれることも多いけれど、先生はどうしてそのような訳になるのかを聞かれた。生徒が間違った答えを言った時などは、他の生徒にもあてて、どう思うかを言わせていた。口頭英作文が多かつたし、その英文をノートに写す時間は説明の後にあたえられた。先生が話されているときは全員先生の方を向いていた。だから授業に集中できたのだと思う。厳しい授業ではあつたが、楽しさもあつたと思う。

先生は他の先生とは授業の迫力がちがうと思います。そして、生徒の発言の細かいところまで聞きのがさず本当に分かっているかどうか確認された。それによく、今までの自分の経験やがんばってこられた先輩の話をされ、やる気を刺激された。

授業中は緊張の連続だった。できなかった時の罰とあのお叱りの言葉が悔しくて、やる気がでたような気がします。理解できない時は、理解できるまで例文をたくさんだして教えてくださった。先生の授業は厳しかったがおもしろみもあった。

#### 4 考察 (音読を成立させる要因)

インタビューから音読を成立させる要因として、まずつぎのようなことがまとめられる。

- 1) 先生自身はつきりとした音読活動の位置づけをしている (特に授業の流れとの関連で)
- 2) 学習者の英語に関する実態を把握していること
- 3) 学習者に対して音読の意義を徹底的に理解させていること
- 4) 音読の様々な形態を学習者にあわせて柔軟に対応していること
- 5) 音読時の適切な指示と follow-up を大事にしていること。
- 6) 読解力と音声的表出能力との関連を重視していること
- 7) 音読を学習者の授業中の定着度をはかる measureing stick にしていること
- 8) 音読時の生徒の performance に対する教師の賞賛の言葉を重要視していること
- 9) 音読と英語の学習的雰囲気との関係を大切にしていること

以上、確かにどれもこれも実りある音読活動のためには不可欠の要因、指導技術であり、教師たるもの常にこのような心構えで日々の授業にのぞまなければならないのではあるが、卒直に言って、あまりに当り前のことのように何が今だに欠けているような思いにとらわれる。

前述の通り、過去に行った先生の授業の分析 (カテゴリー分析) においても、未発表ではあるが、ほぼ同様のデータを得ているのである。確かにそれぞれでよいのではあるが、技術的なものだけで音読が、あのようにかくも見事に成功しうるのであろうか。そのあたりの疑問に答えてくれる鍵は生徒のアンケートの回答にあるのではないだろうか。

アンケートの中で「先生と他の先生の指導の違い」の項で顕著な指摘は、「先生の授業は他の先生と厳しさが全然違う」や「迫力がちがう」というものである。人間は自分が納得できない厳しさには反発したり、面従腹背するものである。しかし、先生の授業においては、生徒はいきいきとして自ら進んで学習に参加していた。アンケート結果の No.2, 質問4 「あなたは授業に一生懸命取り組みましたか」については A はい 83% B いいえ 0% C わからない 17% という数字である。すなわち、生徒は納得して先生の授業の厳しさを受け入れていたわけである。ところで「迫力」という言葉についてであるが、生徒はどのような時に教師の迫力を感じるのだろうか。インタビューの中で、数ある印象に残った先生の発言のひとつに、「生徒の実態に密着した対応が私の教師生活におけるテーマである。」という言葉があった。ものである。いくら学識があってもそれが生徒に受け入れられなければ意味がないのである。生徒の実態を常に把握するように努めながら日々の授業に臨むことが教師の迫力の重要な要素になるのではないだろうか。授業においては生徒と同じ土俵にたつてがっぷりよつに組んで相撲をとる必要がある。先生の言葉では厳しさは「約束ごと」という表現になっているが、結局この「約束ごと」を守るように指導する際に、それを生徒が受け入れるか受け入れないかは、教師が生徒に愛情をもって接しているかどうかにかかっているのではないだろうか。そして、その「約束ごと」が守られれば教

室は英語的雰囲気の中で活気づき、その時初めて、むすびの冒頭にあげた技術的なものに血が通ってきて機能し始めるのではないだろうかと思われる。

(No.1)

### 音読に関するアンケート

★このアンケートは望ましい音読指導とはどのようなものであるかを考察する資料にするものです。以下の設問に卒直に答えてください。

- 1 (Y先生は) 音読の意義を授業中にしばしば説明されましたか。  
A)はい B)いいえ c)よく覚えていない  
「A)はい」と答えた人 どういう説明が印象に残っていますか。具体的に書いてください。
- 2 授業中によく sense group という言葉が使われましたか。  
A)はい B)いいえ c)よく覚えていない
- 3 音読の時に sense group に / のような記号をつけることを指示されたことがありますか。  
A)はい B)いいえ c)よく覚えていない
- 4 chorus reading (一斉読み) の時にははっきりした声で読みましたか。  
A)はい B)いいえ c)どちらでもない  
「A)はい」と答えた人 どうして大きな声で読んだのか自分なりの理由を述べて下さい。
- 5 chorus reading の時は他の生徒も大きな声で読んでいましたか。  
A)はい B)いいえ c)どちらでもない
- 6 chorus reading の際にどのような指示をされましたか。印象に残っているものを具体的に書いて下さい。
- 7 individual reading (指名読み) を生徒にさせるとき先生はよく生徒の発音を訂正されましたか。  
A)はい B)いいえ c)どちらでもない
- 8 発音の訂正は単語単位でしたかそれとも sense group 単位でしたか。  
A)単語単位 B)sense group 単位 c)よくわからない
- 9 individual reading 中に生徒の発音を訂正した後、他の生徒にも一斉に発音するように指示されましたか。  
A)はい B)いいえ c)よくわからない
- 10 音読をすることで英語に親しみを感じるようになったと思いますか。  
A)はい B)いいえ c)よくわからない
- 11 英文の意味の理解と音読練習はどちらが先でしたか。  
A)意味の理解が先 B)音読が先 c)よくわからない
- 12 授業で学習した英文はある程度自信をもって読めるようになりましたか。  
A)はい B)いいえ c)どちらでもない
- 13 英文の意味がわかったうえで音読できることで成就感(達成感)を感じることはありませんか。  
A)はい B)いいえ c)よくわからない
- 14 音読と英語学力についてあなたの思うところを書いて下さい。

(No.2)

- 1 Y先生の授業では英語学習の意義・方法をよく説明されましたか。

- A)はい B)いいえ c)よくわからない
- 2 正解を言った時にはおおいにほめられましたか。  
A)はい B)いいえ c)よくわからない
- 3 授業中の約束ごと(規則)は厳しく守られましたか。  
A)はい B)いいえ c)よくわからない  
「A)はい」と答えた人 特に厳しく守るように指示されたことがあれば書いて下さい。
- 4 あなたはY先生の授業に一生懸命取り組みましたか。  
A)はい B)いいえ c)よくわからない  
「A)はい」と答えた人 なぜですかその理由を書いて下さい。
- 5 先生はあなたがた生徒のことを(学力・人間性・その他)のことをよく知っておられたと思いますか。  
A)はい B)いいえ c)よくわからない
- 6 授業には変化がありましたか。  
A)はい B)いいえ c)よくわからない
- 7 英語の苦手な生徒に対しても指導がいきわたっていたと思いますか。  
A)はい B)いいえ c)よくわからない  
「A)はい」と答えた人 印象に残っている例があれば具体的に書いて下さい。
- 8 中学時代に比べて英語学習に対する姿勢が変わったと思いますか。  
A)はい B)いいえ c)よくわからない  
「A)はい」と答えた人 どのように変わったのかを書いて下さい。  
「A)いいえ」と答えた人 なぜかわらなかったのかを書いて下さい。
- 9 Y先生と他の英語の先生の指導はどこが違うと思いますか。思いつくままに書いて下さい。

### 参考文献

- 青木常雄(1933)『英文朗讀法大意』 東京:研究社。  
 青木常雄先生を偲ぶ会事務局編(1987)『青木常雄先生を偲ぶ』 東京:リーベル出版。  
 荒木茂(1989)『音読指導の方法と技術』 東京:一光社。  
 青木昭六編(1990)『英語授業実例辞典』 東京:大修館書店。  
 青木幹男(1990)『音読指導入門』 東京:明治図書。  
 後田忠勝(1982)『中学校英語 読むことの指導』 東京:東京書籍。  
 飯野至誠他鑑(1964)『不死鳥英語教育ガイドブックス 2 読み方・解釈の指導』  
 東京:南雲堂。  
 一一一(1965)『不死鳥英語教育ガイドブックス 4 発音・抑揚の指導』 東京:南雲堂。  
 一一一(1970)『英語の教育一変遷と実践』 東京:大修館書店。  
 石井正乃助他(1959)『語学的指導の基礎(中)』 東京:研究社。  
 石井正乃助編(1970)『講座・英語教授法 第5巻 読む領域の指導』 東京:研究社。  
 五十嵐二郎(1981)『英語授業過程の改善』 東京:大修館書店。  
 近江誠(1989)『頭と心と体を使う英語の学び方』 東京:研究社。  
 語学教育研究所編(1987)『英語指導技術再検討』 東京:大修館書店。  
 田邊祐司(1988)「中学校英語科における発音指導への一考察」『中国地区英語教育学会研究紀要』  
 No.18:143-147.



- ――(1990)「これからの英語発音指導」 『鈴峯女子短期大学人文社会科学研究集報』  
第37集:113-121.
- ――(1991) Some thoughts on the Teaching and Learning of English Pronunciation in  
the Japanese Classroom :Focusing on English Stress 第17回 全国英語教育学会  
香川研究大会発表資料.
- ――(1991)「Teaching English Pronunciation:Current View-現場教師へのアンケートから」  
『鈴峯女子短期大学人文社会科学研究集報』 第38集:91-107.
- 田辺洋二(1990) 『学校英語』東京:筑摩書房.
- 谷川俊太郎他(1989)『「にほんご」の授業』東京:国土社.
- 築道和明 法則化中学英語(1989)『英語授業を演出する』東京:明治図書.
- 寺島隆吉(1990)『シリーズ授業の工夫3 英語記号づけ入門 英語の授業と英音法』東京:  
三友社.
- 外山敏雄(1991)「朗読を重視したい」『現代英語教育』5月号, P.64.
- 野口芳宏(1991)『教室音読で鍛える(上)』東京:明治図書.
- 野田大三郎「英語学習における動機づけに関する一考察」『島根高英研』No.28 1989.
- 松畑熙一(1991)『英語授業学の展開』東京:大修館書店.
- 松畑熙一 高塚成信(1989)『英語授業を魅力的に』東京:大修館書店.
- 柳井智彦・ぶんごELT サークル(1988)『英語指導の成果をあげる』東京:明治図書.